

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 近藤 亮一

論 文 題 目

A Synchronic and Diachronic Study of *That*-clauses in English
(英語における *That* 節に関する共時的・通時的研究)

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 田中 智之

委員 名古屋大学教授 大室 剛志

委員 名古屋大学教授 町田 健

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、英語における **that** 節について共時的・通時的観点から考察し、その統語構造と歴史的発達を生成文法理論の枠組みにおいて説明しようとしたものである。第1章では、本論文で取り扱う **that** 節に関する現象として、補文標識 **that** の分布、**that** 痕跡効果、外置構文と文主語構文の関係を挙げ、これらの現象が提起する経験的・理論的問題を整理している。第2章では、統語地図作成と呼ばれる最近の研究プロジェクトにおける標準的分析の代案として、節の左周縁部を構成する機能範疇が1つの主要部として派生に導入され、複数の基準が複数の要素によって満たされる場合にのみその主要部が分離して投射するが、複数の基準が1つの要素によって同時に満たされる場合には分離しないとする節構造に関する新たな分析を提案している。

第3章では、英語史における補文標識 **that** の分布について歴史コーパスを用いた調査を行い、頻度は低いものの **that** の省略は古英語においても可能であり、17世紀中に現代英語とほぼ同様の頻度になったことを観察している。この調査結果に基づき、**that** が指示詞として **Force** の指定部に併合される構造と、補文標識として **Force** の主要部に併合される構造が古英語から競合し、徐々に後者が前者に取って代わったという指示詞から補文標識への発達経路を提案している。第4章では、**that** 痕跡効果、すなわち **that** 節の主語が節外へ移動できないという事実について、主語が **Force** と **Fin(iteness)** からなる機能範疇の指定部において主語基準を満たし、その位置で凍結されるという分析を提示している。一方、主語以外の要素が主語基準を満たす場合には **Force** と **Fin** が分離し、主語は凍結されることなく **Force** の指定部を経由して節外に移動することができると主張している。さらに、初期英語では指示詞としての **that** が **Force** と **Fin** からなる機能範疇の指定部に併合され、主語基準を満たすことができたため、主語は凍結されることなく節外へ移動可能であったとし、17世紀頃までは **that** 痕跡効果が見られなかったという事実を説明している。

第5章では、現代英語の外置構文の派生について考察し、**it** が **that** 節内の **Force** の指定部に併合された後、主節の主語位置に移動するという分析を提案している。そして、外置構文における **it** の分布について歴史コーパスを用いた調査を行い、**it** を伴わない外置構文と **it** を伴う外置構文が古英語から競合し、17世紀中に後者の構造に一本化されたことを観察している。17世紀まで前者の構造が許されていたのは、**that** が指示詞として **Force** の指定部に併合されることが可能であり、**it** を併合する必要がなかったからであると説明している。文主語構文は後期中英語に出現したが、この時期に指示詞としての **that** が **Force** の主要部に併合されるようになり、**that** 節が名詞性を獲得したため、**that** 節が主語位置に現れる文主語構文が可能になったと論じている。第6章では、本論文の内容の総括、本論文の経験的・理論的貢献を述べるとともに、残された問題とその可能な解決策を提示し、今後の研究動向を展望している。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

英語における **that** 節に関する生成文法理論に基づく従来の研究では、個々の言語現象がお互いに関連付けられることなく論じられることが多かった。これに対して、本論文は、補文標識 **that** の分布、**that** 痕跡効果、外置構文、文主語構文などの **that** 節に関する現象について、共時的・通時的観点から包括的に論じた初めての研究であり、特に以下の2点において非常に高く評価される。

第一に、最近の生成文法理論における統語地図作成のプロジェクトに対する理論的貢献が挙げられる。統語地図作成の標準的なアプローチでは普遍的な機能範疇の階層構造が仮定されているのに対し、第2章では節構造を構成する機能範疇が1つの主要部として派生に導入され、複数の基準が1つの要素により満たされない場合に限り、その主要部が複数の機能範疇に分離するという新たな提案をしている。この提案は余剰的な構造や操作をなくすという、生成文法理論における経済性の指針に合致するとともに、第4章では長年の課題であった **that** 痕跡効果をそれに基づいて説明することに成功している。さらに、初期英語における **that** 痕跡効果の不在を含めて、**that** 節からの主語の移動が可能な事例にも十分な配慮がなされている点も評価される。

第二に、英語史における補文標識 **that** の発達経路を明らかにし、それと外置構文の歴史的発達を関連付けて説明している点が挙げられる。従来の研究においても **that** が指示詞から補文標識へと変化したことが論じられているが、第3章における歴史コーパスを用いた調査により、**Force** の指定部に併合される **that** を持つ構造が17世紀まで存続していたこと、および **Force** の主要部に併合される補文標識としての **that** を持つ構造が古英語から既に存在していたことを実証し、従来とは異なる **that** の発達経路を提唱した意義は大きい。そして、外置構文の **it** が **Force** の指定部に併合されるという分析の下、**that** が指示詞であった時期は **it** を併合する必要がないため、**it** を伴わない外置構文が可能であったと主張している。一見すると無関係であるように思われる、補文標識 **that** の発達と外置構文における **it** の分布を関連付けた点は斬新であり、第5章における歴史コーパスを用いた調査からも両者の関係が支持される。

しかし、本論文の考察に問題がないわけではない。第2章以降の議論において、節構造を構成する機能範疇の分離を促す要因や分離の仕方が、必ずしも明らかではない箇所がある。また、第5章の文主語構文に関する議論において仮定されている、**Force** の主要部に併合される指示詞としての **that** が、第3章で提唱された **that** の発達経路の中にうまく組み込まれていないという問題もある。しかし、これらの問題は今後の研究によって解決可能であり、英語における **that** 節に関する包括的研究である本論文の学術的価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのに相応しい水準の研究であると判断した。